

## プラトンにおける不死の概念：美のアイデアとの関連において

### The Concept of Immortality in Plato in Connection with the Idea of Beauty

坂上 宏

Hiroshi Sakagami

キーワード：プラトン、不死、美、アイデア、エロース、徳、幸福

#### 1. はじめに

「神を観、美を観ようとする者は、誰でもまず何よりも、神に類似していなければならない。美しい自己となっていなければならない」<sup>1)</sup>。

この言葉は、新プラトン主義の代表的哲学者プロティノス (Plotinus, 205?~270) によるものである。ここで言われている「美」とは、単に時間とともに移ろい行く現象的な美を指しているのではない。われわれが生きているこの世界の様々な美を、美しくさせている美そのもの、美の本質、すなわちプラトン哲学の肯綮をなす美のアイデアを意味している。そして「美しい自己」とは、内面上の優れた状態、つまりプラトンが述べるところの知恵、勇気、節制、正義、その他の徳を魂が備えている状態としてひとまず言っておこう。また、このプロティノスの言葉は、“観る者”と“観られるもの”が、美を介在して親和性を持つことも示している。

もちろんプロティノスより遡ること遙か昔に、プラトン (Plato, B. C. 427~B. C. 347) その人も、神に「愛されんとする者は、みずからもまた力のかぎりをつくし、そうした神に似たものとならなくてはならない」<sup>2)</sup>と述べている。それでは神に似た者となり、美そのものを見た時にいったい何がもたらされるのであろうか。プラトンはその著作『饗宴』の中で、ディオティマという架空の女性に「まさにその者こそ不死の者となりうるのだ」<sup>3)</sup>と語らせている。

後で紹介する通りプラトンは、美のアイデアを認識するためにはふさわしい資質が必要であり、また幾多の段階や努力を経なければならないと述べている。彼は、そうした条件を備えた者だけが不死の者になりうる、言い換えれば永遠の生を受ける資格があると述べているのである。本稿では、主として美のアイデアと不死の関係や不死（不死的）の意味について、プラトンの言説を探っていききたい。

ここで本稿の執筆の意図について少し記させていただきたい。筆者は、もともと哲学を志す者でもなければプラトン学徒でもない。しかしここ二十余年の間、勤務校の授業で基礎教養科目「政治学Ⅰ・Ⅱ」を担当し、古代ギリシャの政治哲学などを講義してきた。特に哲学の歴史に偉大な足跡を残したプラトンの思想を学生諸君に紹介するたびに、彼の思想について自分なりに整理し、さらに理解を深めたいと思うようになった。本稿は、このような筆者の学習志向に基づくものであって、学術的価値からは程遠いものであることをお断りさせていただく。

#### 2. 現象界と実在界：アイデアと不死

ここではまず、プラトンのアイデア思想と密接に結びついている世界観から論を進めたい。彼はその作品『テアイテトス』の中で、ソクラテスに次のように語らせている。

「むしろそれ（悪くて劣ったもの）がわれわれの住むこの場所を取巻いて、われわれ限りある生を持つところの種族について回るといのはどうしても必然なのです。それだからまた、できるだけ早く、この世からかの世へ逃げて行くようにしなければならんということにもなるのです。そしてその『世を逃れる』というのは、できるだけ神に似るといことなのです。そしてその神まねびとは、思慮のある人間になって、それでもって人に対しては正、神の前には義なる者となることなのです」（括弧は筆者）<sup>4)</sup>。

この言葉は、「世を逃れる」という表現が示す通り、厭世的に語られている点が印象的であるが、プラトン（ソクラテス）の二元論的世界観が示されていることで思想的に重要である。すなわち「この世」とは、現象界のことを指しているものと思われる。そこではあらゆる事物が生成流転しており、人間の感覚はそれらの真の姿を捉えることはできない。一方「かの世」とは、イデア、つまり事物そのもの、事物の本質が存在する実在界のことである。プラトンの所説によれば、現象界の事物はイデアの影であるか、あるいはイデアの性質を分有しているに過ぎない。個々の人間が、その事物について何らかの印象を受けるのはイデアがあるからである。例えば草花の美しさはやがて移ろいゆくものであるが、いまこの時の美しさを美しいものとさせているのは美のイデアがあるが故であり、そして個人によって美の感覚に差異はあるものの、美しいと感じさせるのはやはり美のイデアがあるからこそなのである。要するに現象界における事物の存在の根拠、そして認識の根拠はイデアに求められるのである。

プラトンによれば、実在界においてイデアは、生まれることも滅することもなく同一の様相を保っている。人間の感覚は時間と空間によって左右されるため、また個々の人間によって感覚の働きに相違があるため、感覚をもってしてこの事物そのものを把握することができず、ただ思惟（言論）によってのみそれらを認識できるのである。かくして「かの世」において事物そのものであるイデアは、生死を相対化したとこ

ろに厳然として真に存在する。

そして人間の本性は、このような永遠なるイデアと親和性を持つと考えられる。例えばプラトンはその著作『ティマイオス』の中で、「死すべき種族」（人間）には、「神的」と呼ばれる「不死なるものと名を等しくするにふさわしい部分」があり、その「部分」を作ったのは神である<sup>5)</sup>、と記している。この「部分」とは、人間の魂における知恵（知性）の領域である。このようにプラトンによれば、死すべき宿命の人間は、魂のうちに不死的な部分を備えているのであり、したがって永遠（不死）という点において人間の魂とイデアは、相通ずる性格を持つのである。そして後述する通りプラトンは、人間にとって最も価値のあることは、この魂の神的部分によって、美そのもの、美の本質を探究することであると説いたのである。

プラトンの作品『国家』第6巻では、イデアの特徴や哲学者の「自然的資質」が示されているが、それらの言葉の中から無窮としてのイデアの性質や哲学者の理想の姿を読み取ることができる。例えば次の一節を紹介しよう。「哲学者とは、つねに恒常不変のあり方を保つものに触れることのできる人々のことであり、他方、そうすることができずに、さまざまに変転する雑多な事物のなかにさまよう人々は哲学者ではない」<sup>6)</sup>。文中の「恒常不変のあり方」とは、不死としてのイデアの様相である。イデアは変ることなく実在界に永遠に常にある。そして、永遠、真実、美を求める哲学者を魅了し、引き寄せるのである。

### 3. 時間と不死：永続と永遠

次に不死の意味について、時間の観点から考えてみたい。その際に、研究者伊藤晴美と田之頭一知の所説<sup>7)</sup>を随時参考にする。

プラトンの時間論を検討するにあたって手掛かりとなるのは、上記と同じく『国家』第6巻における哲学者の資質に関する次の言葉である。「では、壮大な気宇をもつ精神、全時間と全存在を觀想するほどの精神、そのような精神の人

が、この人の世の生を何か重大なものとみなすというようなことが、考えられるかね？」<sup>8)</sup>。

この言葉から、不死の意味について推し量ることができる。文中の「全時間と全存在」と「この人の世の生」を対比させれば、後者が時間という有限の要素に支配された現象界と人間の一生であることが容易に理解できる。そこでは、あらゆる事象が、始まりと終わり、原因と結果を必然的に伴っている。一方前者は、実在界の属性を示しているの一応言えるかもしれない。

「全時間」とは時間の悠久の流れ、限りないほどの時間の持続を意味していると考えられる。これはまさしく不死的であり、神的ではある。しかしながら不死そのものとは言えないであろう。なぜならば「全時間」は、時間の持続を前提としており、その中であらゆる事象は変化していかざるを得ないからである。たとえ際限がないように思えても、連綿と続く時間の果てにはやがて終焉が訪れることは必定である。

そうであれば全時間とは、時間の永続的持続を意味するにとどまるのであり、永遠には似ているが永遠そのものではない。したがって永遠(不死)とは、継続する時間を超越したところに求められなければならない。このことについて伊藤晴美は、「無時間的永遠」、「無時間的生」と解釈している<sup>9)</sup>。

以上のことから実在界に存在するアイデアは、過去・現在・未来という時間の流れから隔絶された彼方にこそ永遠に実在する。そしてアイデアは、不死の存在として生滅流転せずに「無時間的生」を送るのである。プラトンはその作品『パイドン』において、「一方には、神的であり、不死であり、可知的であり、単一の形相をもち、分解されえず、常に同じように自分自身と同一であるものがあるが、この種のものに魂はもつとも似ているのであり、他方では人間的であり、可死的であり、多様な形をもち、知性的ではなく(無思慮であり)、分解可能であり、けっして自分自身と同一ではないようなものがあるが、今度は肉体がこの種のものにもつとも似ているのである」<sup>10)</sup>と、アイデアが不死的ではなく、不死であることを明確に述べている。なお、「神的

であり、…自分自身と同一である」の箇所がアイデアを指すものであることは言うまでもない。

時間と不死(永遠)の関係についてさらに検討を続ける。プラトンは、時間は神が宇宙を創造する際に、「永遠」という「モデル」(アイデア)に似せて作った「動く似像」であると述べている。彼は『ティマオス』において、時間と宇宙の共通性について次のように記している。

「…時間が宇宙とともに生じたのは、何しろ両者はともに生み出されたのだから、またいつかそれらに解体ということが何か起こる場合にも、やはり両者が解体するようにということだったのですし、また、時間が『永遠』をモデルとして生じたのは、宇宙ができるだけかの[宇宙の]モデルに似たものであるようにということだったのです。というのは、モデルのほうは全永遠にわたって、あるものなのですが、宇宙のほうは、これはこれで、全時間にわたって終始、あつたもの、あるもの、あるだろうものだからです」<sup>11)</sup>。

この言葉の最後で述べられている「あつたもの、あるもの、あるだろうもの」とは、現象界における時間の経過「過去、現在、未来」と、それぞれの時制に存在する事物を意味している。そこでは、あらゆるものが生成する以上、必然的に「解体」(終焉)を余儀なくされる。宇宙も時間もどんなに遼遠に続いていくものであったとしても、結局はその運命から逃れることはできない。対照的に永遠は、「全永遠にわたって、あるもの」として描かれている。つまり永遠とは、現在、ただそれのみであり、過去と未来は存在しない。そうであれば永遠においては、過去の営みを回顧する歴史は成立せず、将来に対する予測も無縁なものであろう。

永遠とは、恒常不変の「ある」、すなわち現在だけであるとすれば、その「ある」のあり方をどのように考えたらよいであろうか。「ある」は静的なのであろうか、動的なのであろうか。換言すれば永遠とは、現在が不変のままそこに存在するのか、あるいはなんらかの持続の契機を認めるべきなのであろうか。伊藤晴美によれば、プラトンが説く永遠について、そこに「持

続が認められるか否か」という問いに対して、研究者の間では見解が分かれているという。持続を認めている研究者の解釈として、伊藤は、「永遠的な変化のない持続 (the eternal unchanging duration)」（コーンフォード、Cornford, F. M.）という見解を紹介している。伊藤は、持続を認める他の研究者の解釈を評して、「時間を超える永遠を時間のうちでしか志向できないパラドキシカルな状況」<sup>12)</sup>と指摘しているが、これは筆者としても首肯できるところである。永遠に「持続」や「連続」の要素を持ち込めば、そこにおのずから時間の経過やそれに伴う変化の様相を想起せざるを得なくなる。つまり現象界に生きるわれわれ人間の思惟は、結局のところ時間と空間に制約されてしまうのであって、それらの枠の外にある永遠そのものの性質を理解して表現しようとするには、必然的に限界があると言わざるを得ない。

時間と不死（永遠）の関係について、次に田之頭一知の解釈を紹介する。田之頭は、「(アイデアの) 本性上の不変性や同一性こそ炙り出すために時間が存在しているのである」(括弧は筆者)と時間の意義を述べている。そして田之頭は、プラトンの説く時間は、永続的持続性という点で「永遠との類縁性」があるが、同時に「永遠との差異性」もあると言う。それはすでに述べた通り、宇宙における時間の持続が無窮なほどであっても、結局は有限であるということであろう。このことについて田之頭は、「プラトンの時間は、永遠を写す動く似像であるがゆえに、そこには永遠からの劣化があり、不完全なものが忍び込んでいる」<sup>13)</sup>と説明する。

田之頭は、「(プラトンは) 時間を今の連続として捉えていると言ってよいが、その“今”は、過去と未来が制作されることによって、まさしく“現在”という時間様相として確立されることになると言えるのではあるまいか」(括弧は筆者)と問題提起をし、「時間を永遠との関係で考えるのではなく、時間を時間として眺めるならば、まさに過去と未来がそこにあるということが時間を時間たらしめている、ということなのである」<sup>14)</sup>と時間そのもののあり方に論を進め

ている。

「時間を時間として眺める」という着想は、「時間は永遠の動く似像」というプラトンの時間論を相対化しようとする意図が伺えることもあり、大いにユニークであるように思える。田之頭によれば、この視座は、プラトンの時間論とは「違う永遠のルート」<sup>15)</sup>を切り開く可能性を持っているとされる。「永遠のルート」とは、彼の言葉に従えば、「現在への立脚によって過去と未来の制作可能性を呼び込む」ことを意味しているのであろうか。このような田之頭の見方について、以下に管見を記させていただきたい。

田之頭の視座は、プラトンの時間論から離れて、過去と未来が現在を規定するものとして捉えなおしている。筆者なりの解釈では、この立場は人間を歴史的存在として位置付けたときに、あるいは人間の意識が歴史を規定すると考えることによって始めてその有用性が照射されることになるであろう。例えば「より良い未来を目ざして今を懸命に生き、今をより良く生きるために過去に学ぶ」という姿勢は、現在を起点としたものであり、人間による過去と未来の「制作可能性」を主張する田之頭の見方と符合するものであると言えよう。

しかしプラトンの『饗宴』の中に、これに似通った視点を見出すことができるのではないだろうか。例えばプラトンは、古い世代から新しい世代へと代わっていく妊娠と分娩、復習によって絶えず更新していく知識などを具体例として挙げている(後述)。これらのことは、人間が不死的なるもの、神的なるものを求めて、現在から未来へ、そして現在から過去へ働きかけようとする営為であると言えよう。次節からは、主に『饗宴』の叙述に基づいて、人間の不死の問題を美の探求との関連において考えていきたい。

#### 4. 美とエロース

岩波文庫版『饗宴』の翻訳者久保勉は、「思想家にして同時に詩人たる彼(プラトン)の本領が『饗宴』におけるほど充分に魅力的に発揮さ

れている対話篇は他に無い(括弧は筆者)のであり、彼の他の作品『パイドン』や『パイドロス』と共に、「高遠にして独創的な哲学的精神ないし態度と、至妙にして多面的なる表現(造形)力とを兼備せる点において、これらの三篇の右に出るものは無いといっても過言ではあるまいと思う」<sup>16)</sup>と絶賛している。

『饗宴』の中で最も劇的なのは、美を果てしなく追い求める人間が、遂に美そのもの、すなわち美のアイデアと出会うことになれば不死になりうる、とディオティマという「虚構」の女性に語らせる場面であろう。プラトンによれば、美をわがものしたいとする欲求こそエロースと称されるものである。ディオティマが不死について語る場面は後述することになるが、しばらくはそのクライマックスに至る前段階として、美とエロース、幸福と徳、出産と不死、不死への道程の順に、ディオティマの言葉を中心に取上げながら、プラトンの叙述を見ていくことにする。まず本節と次節では、エロースの内容について明らかにしておきたい。

ディオティマは、そもそもエロースとは「偉大な神霊(ダイモン)です、ソクラテス。そして神霊的なものはすべて神と死すべきものの中にあるからです」と、エロースが神と人間の間にいる存在であり、神と人間の間を媒介する役割を担っていることをソクラテスに語っている<sup>17)</sup>。他方で彼女は、エロースとは「美しいものに対する恋」であり、「知は最も美しいものの一つ」であるから、「エロースは必然的に知を愛するもの」<sup>18)</sup>でもあると述べている。つまりエロースは、美(知)に対する欲求という心的機能とそれに伴う行為としても見なされているのである。

エロースは必然的に知を愛するもの、というディオティマの言葉は、まさにフィロソフィ(愛知)そのものを端的に言い表すものである。愛、欲求といった非ロゴスの要素つまりパトスが、知というロゴスのなものを獲得するための機縁となっているわけだが、この点について久保勉は、主知主義者と見なされているプラトンが、知に対する「最高の愛の情熱」、「熱烈な願望」

<sup>19)</sup>というパトスによって突き動かされているものとして、その哲学の特色を解説している。

## 5. 幸福と徳

ディオティマは、美しいものを「よきもの」に言い換えて、人間はよきものを所有することで幸福になることを願うものであり、この希望とエロースは万人に共通のものだと述べている。そして彼女は、エロースとは「よきものが永遠に自分のものであることをめざすもの」と総括している<sup>20)</sup>。この主張の特徴は、「美しいもの・よきもの・幸福」が連結していることである。こうした思考様式は、プラトン(あるいはソクラテス)の哲学的思索における特徴をなすものであろう。例えばプラトンは、その著作『ゴルギアス』の中で、ソクラテスに次のように語らせている。「正しくて、勇気があって、そして敬虔な人であるから、(それらの基本的な徳を全部そなえているという意味で)、完全に善い人なのだ。そして善い人というのは、何ごとを行なうにしても、それをよく、また立派に行なうものだ。で、よいやり方をする者は合わせであり、幸福であるが、これに反して、劣悪でそのやり方の悪い者は不幸である、ということは万々間違いないのだ」<sup>21)</sup>。ここでは「美」について直接的に言及されていないが、「知は最も美しいものの一つ」という上記のディオティマの言葉(注18の箇所参照)を想起するならば、「よいやり方」についての知識は「美」であると言えよう。したがってプラトンの言説に従うならば、「よいやり方」について知っている人は徳を備えた人であるとともに「善い人」であり、そしてその人はよい行いをするから「幸福」になることができるのである。

さらに、この「美しいもの・よきもの・幸福」は、徳がともなうというプラトンの主張にも留意しておきたい。それは『ゴルギアス』の他の箇所でも、「いやしくも幸せになろうとするなら、正義と節制の徳がそなわるようにと行動しなければならぬのだ」<sup>22)</sup>と記されている通りである。これらのプラトンの所説は、現世において

人間が備えるべき“たしなみ”やそうした行いが生む世俗的徳の意義を説いているものとして考えられる。後述の通り彼は、美のアイデアに触れた者は、「真の徳」を生み育てるのだと述べているが、この真の徳はもっと観念的、精神的な性格のものである。それは、神的な理性とでも呼べるようなものであろう。

ところでプラトン（あるいはソクラテス）が考える幸福とはいったい何であろうか。それは、彼の作品『ソクラテスの弁明』の中でソクラテスが力説しているように、「評判や地位」、「身体や金銭」といった世俗的欲望に根差した“感覚的”な幸せではない。つまり真の幸福とは、「思慮と真実」に関心を向け、「たましいをできるだけすぐれたよいものする」<sup>23)</sup>ような知性的な営為とそれから得られる充足感にこそ求められるようである。例えばプラトンは、死刑判決を受けたソクラテスが法廷において語った言葉として次のように記している。「人間にとっては、徳その他のことについて、毎日談論するという、このことが、まさに最大の善きことなのであって、…これに反して、吟味のない生活は、人間の生きる生活ではないと、こう言っても、わたしがこう言うのを、諸君はなおさら信じないであろう」<sup>24)</sup>。

文中の「吟味」とは、「思慮と真実」に関心を向け、真と偽、善と悪、美と醜を選別する魂の知性的働きであると考えられよう。そして「最大の善きこと」とは、最大の幸福を意味しているのではないだろうか。この点を裏打ちするように、上の言葉に続いて死に赴くソクラテスは、「かの世」（ハデス、冥界）において、そこにいる人々と「問答し、親しく交わり、吟味する」ということは、はかり知れない幸福となるでしょう（傍点は筆者）<sup>25)</sup>と語っている。

## 6. 出産と不死

さて、議論を不死に関するプラトンの所説に戻したい。ディオティマがソクラテスに対して、エロースとは「美しいものに対する恋」であり、「よきものが永遠に自分のものであることをめ

ざすもの」と語ったことは、すでに触れた通りである（注18、20の箇所参照）。これらの言葉に続いて彼女は、エロースが単に美の所有に対する欲求だけではなく、それは「肉体的にも精神的にも美しいものの中において出産すること」でもあると主張する。そして彼女は、出産の意義について、「死すべきものである生物のうちに、不死なるものとして内在して」おり、それは「神的」なものだと述べるのである<sup>26)</sup>。

つまりディオティマは、生物としての人間は、妊娠と出産を通じて不死（不死性）を獲得することができるかと説いているのである。個としての人間は、生と死によって必然的に規定されている。しかし類としての人間は、生殖によって生命を受け継いでいくことで、個としての時間的有限性を可能なかぎり克服することができる。まさに出産こそ、「永生不死」を可能にするものなのである。ディオティマは、エロースと不死が分かち難く結びついているとして次のように述べる。「よきものに加えて不死を欲求するということは、いままでに認められたことからして必然のことです。いやしくも恋（エロース）の目指すものが、よきものを永遠に自分のものとして持つことであるならば、…以上のことからして恋は必然的に不死を目指すものでもあるのです」<sup>27)</sup>。

このようなディオティマの見方の中から、出産と不死の意味するものについて考えてみたい。まず出産についてであるが、彼女の言葉にもある通り、それが肉体的のみならず精神的なものでもあることを留意しておきたい。ディオティマは、出産という方法が、新旧の個の交代を行うものであるから、死すべきものを不死にすることを可能にさせると述べる。それは、動物の各個体に見られるだけではない。魂に関すること、例えば「性向、人柄、意見、欲望、快樂、苦痛、恐怖」といった性格、感情、志向、欲求なども、各人の中で停留することなく、生まれては消えていく。ディオティマは、この点に関して詳細に述べていないが、人間が外的環境と接する中で、自己の「魂」がそれと調和あるいは反発し、その結果新たな「魂」となって産み

出されることを説いているのだと思われる。このような精神の受胎・出産の例として、ディオティマはさらに知識のあり方について言及する。その言葉によれば、知識も同一不変であり得ず、常に忘却されてしまうが、復習によって従前と同じ知識として再生される。つまり自己の中に植え付けられていた知識は、復習という作業によって保全され、あるいは記憶が組み直されることによって、厳密に言えば新たな知識となって生まれ変わるのである<sup>28)</sup>。

このように出産によって、新旧の新陳代謝が間断なく行われ、個としての肉体や精神が永続的なものとなっていくわけだが、この代謝は、単に同じものを産み出すだけの“単純再生産”ではないであろう。今よりもさらに美しく、さらに善いものを求めて行われる“拡大再生産”として考えられるべきである。この点については、エロースとは「よきものが永遠に自分のものであることをめざすもの」というディオティマの言葉の中に含意されているように思われる。また彼女は、エロースとは「美しいものの中での出産と分娩を目指すもの」<sup>29)</sup>とも述べているが、この言葉を踏まえて言えば、エロースとは美の受胎であり、美の出産、言い換えれば美との調和、美の創作、そして美の発展を目指すものと言えるのではないだろうか。

次に出産との関連における不死の性格についてであるが、いわゆる新陳代謝によって獲得される不死は、肉体的にも精神的にも時間の永続的持続を前提とするものであり、永遠つまり不死そのものとはなり得ないであろう。生物としての人間、その知性によって産み出された英知、美的感性によって創り出された芸術は、「出産」によって世代から世代へと継承され、高められてきたものである。その歩みは宇宙が解体されるまで、つまり時間が続くまで止むことなく行われる、とひとまず考えることができよう。しかしそれは、時間と空間の制約を免れることはできない。言い換えればその歩みは、未来永劫どんなに長い間続いていくとしても結局は終末を迎える、という死すべき運命のものであることに代わりがないのである。

ディオティマは、死すべきものと不死について次のように語る。「まことにこの方法(出産)によって、死すべきものはすべて保全されるのです。つまり、神的なもののようにまったく同じものとして永遠にあるという仕方ではなく、古くなり去り行くものが、かつての自分と同じような別の新しいものを後に残していくという仕方です。この工夫によって、…死すべきものは、肉体でもそのほか何でも、不死にあずかるのです。しかし不死なるものは別の仕方によってです」(括弧は筆者)<sup>30)</sup>。

文中の「不死にあずかる」とは、出産によって与えられた不死(不死性)であり、時間や空間に制約された永続的持続を意味していると言える。これは言わば不死的な生である。他方、「不死なるものは別の仕方によってです」とは、後で述べる通り窮極とされる美のアイデアに触れたことでもたらされる真の不死であり、永遠の生のことを指しているものと考えられる。

## 7. 不死への道程

ディオティマは、出産と不死に関してソクラテスに説いた後、遂に「見神に窮まる最奥の秘儀」を彼に伝授する。それが美そのもの、つまり美のアイデアへの道である。この「恋(エロース)の道の窮極目標」に至る「正しい進み方」は、次の段階を経るものとされる。以下、『饗宴』から要約抜粋するとともに、小見を付記しておきたい。

まずは美しい肉体に対するエロースである。最初は一つの美しい肉体を恋い求め、次は二つの肉体を、そして美しい肉体全部を恋する者とならなければならない。ディオティマは、初めに一つの肉体を恋い求めて、「美しい言論」を生み出さなければならないと述べている。美しい言論とは、優れた知性(ロゴス)やそれに関わる徳を意味しているものと思われる。肉体に対するエロースは、単なる感覚的な欲求を満たすことを目的とするのではなく、知的な産物を必要とするところに、プラトンのエロース論の特徴が表れている。

すべての肉体の美しさを恋し、結局肉体美の同一性を悟った者はエロースの次の行程へと進まなければならない。それは魂のうちにある美を恋い求めることである。この美についてディオティマは、「人間の営みや掟に内在する美」とも言っている。これは優れた行為や習慣、それらに関わる徳であると解釈できる。

人間の営みの次に導かれていくのは、知識の美に対するエロースである。その目的についてディオティマは、もはや特定の肉体や営みの美に魅かれるのではなく、「美の大海原」に乗り出して、もろもろの知識の美に接することにより、自らも言論や思想を生み、やがて美そのものに関する知識を得るためであると述べる<sup>31)</sup>。この段階に至ってエロースは、現象界の個々の美を対象としていたものから、次第に実在的な美へと脱却しつつあるように思える。かくてエロースは、いよいよ最後の目標へと誘われていくことになる。

## 8. 美のアイデアと不死

さまざまな美を求めて、エロースの道をひたすら上昇していくと、遂に美のアイデアに到達する。ディオティマは、それこそ「窮極最奥」<sup>32)</sup>のものだと高唱するのである。

彼女は、この遭遇について「突如として、本性驚嘆すべきある道を観得する」<sup>33)</sup>と述べている。この「突如」という語には、美のアイデアとの出会いが、それまでの美の探求とは“質的な”差異あるいは転換を意味するものであることが含意されているように思われる。それは感覚的な美、個々の美の探求から、現象界のあらゆる美を美しくさせている美の本質との出会いであり、真の実在に対する観照である。

また、この「突如」に端を発する美のアイデアとの出会いを描写した場面について、それはプラトンの文学的想像力による飛躍を物語る修辭的技巧と見なすこともできるかもしれない。ここで言う飛躍とは、現象界から実在界への超絶的移動ということである。例えば後述する通り、「虚構」の女性ディオティマが、美のアイデアを

観じた人間は不死的ではなく不死となりうると語った情景などは、この想像力の極みであると言えるのではないだろうか。岩波全書版『饗宴』の翻訳者鈴木照雄は、この対話編が「文学的虚構の書」<sup>34)</sup>であると評しているが、この言葉は、『饗宴』の作品としての性格を端的に示していると言えよう。もちろん鈴木は、このプラトンの作品が、宴（うたげ）を形式とするクセノポンやエピクロスその他歴代の著名な作者のものよりも、その価値は比較にならないほど秀逸であると強調しており<sup>35)</sup>、「虚構」という語に何ら否定的な意味が込められているわけではないであろう。

いずれにせよ、『饗宴』を単なる文学的ファンタジーとして断ずることは全く不適當であろう。筆者には巨星プラトンを評するほどの力量はまったくないが、美への欲求と不死という哲学的にきわめて深遠な主題に対する彼の筆致は、人知の及ばない透徹した真理を貫いているように思われるのである。

さて美のアイデアについてのプラトンの描写は、『饗宴』211A～E および 212A～C に具体的になされている。ここでは、その中から次の通り要約抜粋して紹介する。

そもそも「かの美」は、「それ自身、それ自身だけでそれ自身とともに、単一な形相をもつものとして永遠にある」ものである。すなわち特定の関係、人々、場所によって美しいとか醜いとか受け取られるようなものではない。また顔や手のような身体の特定の部分として現れることもなく、特定の言論や知識でもなければ、動物や大地や天空などのうちに現れる具体的なものでもない。これらの中に表象される美は、美そのものである「至上の美」を分有したものである。この「美そのもの」はそれ自身で美しいのであって、現象界における感覚的な事物と違って、他から影響を受けることはなく、生成消滅することもない。すなわち不死の存在である。この窮極の美に到達するには、美しい肉体に対する恋（エロース）から始まって、美しい人間の営みへ、それから美しい学問へ、最終的に美そのものを対象とする「かの学問」にたどり着

き、美そのものを知るに至ることになるのである<sup>36)</sup>。

この説明にある通り、「美そのもの」の探求に「かの学問」が決定的な役割を担っている。この学問とは哲学を指すのであろう。プラトンの『国家』第6巻には、このことを示唆する次の言葉がある。「哲学者の自然的資質について、…彼ら哲学者たちは、生成と消滅によって動揺することなくつねに確固としてあるところの、かの真実在を開示してくれるような学問に対して、つねに積極的な熱情をもつということ」<sup>37)</sup>。哲学者が熱情を抱く学問は哲学である、と断ずるのは至極当然であろう。また『パイドン』では、「正にそれで有るところのもの」(アイデア)は感覚で捉えることはできず、思惟の働きによってのみそれが可能であると述べられている<sup>38)</sup>。学問(哲学)も思惟もそれぞれ知であり、そして知性の作用であるから、プラトンの所説に従うならば、アイデアの探求のためには優れた知恵こそ不可欠なのである。「壮大な気宇をもつ精神、全時間と全存在を観想するほどの精神」や「最大の学業にもよく堪えうるような自然的素質」を備えた真の哲学者こそ、そうした卓越した知恵という徳を持つものとされる<sup>39)</sup>。

美のアイデアへ向うエロースの道は、同時に至上の知を求め道でもある。それはまた、最高の徳を自らの手に収めるための道である。いよいよこの窮極の美に遭遇した人間は、時間を超越した存在になることが可能になる。それが「不死」である。ディオティマは次のように語っている。

「それともあなたは考えてみないのですか。…ここにおいてのみ、すなわち、かの美を見るに必要な器官をもってそれを見ているこのときのみ、次のようなことが起るであろうということを。それは、彼の手に触れているものが徳の幻像ではなくて真の徳であるからして、その生むものも徳の幻像ではなく、真の徳であるということ。さらにその者は、真の徳を生みそれを育てるがゆえに、神に愛される者となり、またいやしくも人間のうち誰か不死となることができるならば、まさにその者こそ不死の者と

なりうるのだということ」<sup>40)</sup>。

この言葉の中で言及されている「不死」の意味について考えてみたい。文中にあるようにプラトンは、「かの美」すなわち美のアイデアを見た人間は不死の者となりうる、とディオティマに語らせている。ここでは、時間の永続的持続を意味する「不死的」ではなく、永遠や無時間的生の表現である「不死」という語が用いられている。つまりプラトンは、時間を超越した窮極の美を見た者は永遠に生きると述べているのである。

管見の限りでは、『饗宴』の中でプラトンは、この不死の内容についてさらに言葉を継いで説明していないので、以下に前出伊藤の解釈を紹介することにしたい。

伊藤は、時間を越えた永遠の存在である美のアイデアとの接触は、時間の枠の外において行われるのであるから、美のアイデアを観照する者はアイデアと同じ永遠の位置にいることになり、「そのまま不死になることを可能にするものとなる」と述べる<sup>41)</sup>。伊藤は、「そのまま」という語の意味を説明していないが、それを推し量って言うならば、上のディオティマの言葉は、美のアイデアに見て触れた者は肉体も精神も時間を越えた永遠の生を獲得することが可能になることを述べたものとして考えられる。伊藤は、この不死が『パイドン』で語られる「魂の不死」、「魂の不滅」とは異なるものとして区別している。『パイドン』の「靈魂不滅の証明」の章(70C~107B)では、「死者たちの魂がかならずどこかに存在していて、そこから再び生まれてくるはずだ」<sup>42)</sup>というソクラテスの言葉が示すように、魂の輪廻転生が語られている。伊藤によれば、これは「時間の永久的な流れのうちに魂は生き続ける」に過ぎず、時間の概念を越えた永遠の生ではない<sup>43)</sup>。さらに言えば、魂の輪廻転生は身体と魂が切り離された状態、つまり個体としての人間の死を前提としているが、先のディオティマの言葉の中の「不死」とは、個体としての人間が魂を備えている状態で迎えるものである。つまり魂の輪廻転生と美のアイデアの観照による不死とは、質的に内容が異なるのである。

しかしながら生身の人間が、「そのまま不死」になることなどももちろんありえない。したがってディオティマが語る「不死」は、既述したようにプラトンの傑出した文学的表現として解釈することも可能であろう(注34,35の箇所参照)。他方で浅学の筆者としては、「そのまま不死」という伊藤の解釈をすべて斥けるほどの見識は持ちあわせていない。また、「不死」をめぐるディオティマの言葉の中に、深遠な哲学的意味が韜晦されているのではないか、という推測もできるように思われる。筆者としては、イデアと人間の関係について、さらに碩学諸賢の論考にあたって学ばなければならないと考えている。

ただ少なくともこの「不死」という言葉について言えることは、プラトンはそこにすぐれて精神的な意味を込めたのではないかということである。それは、魂の本質、魂そのもののあり方に関わることである。以下、プラトンの所説に依拠しながらこの点について検討したい。

人間が美のイデアにたどり着き、不死を獲得するためには、哲学者が有する自然的資質や壮大な精神が必要であり、そしてあらゆる美の探求を経るべきである、というプラトンの主張については既述の通りである(注8,37,39の箇所および「7. 不死への道程」参照)。これらのほかに彼は、魂の純粋さ、言い換えれば魂が魂そのものにならなければ、窮極の存在であるイデアを認識することはできないと述べている。例えば『パイドン』の中で、彼は次のように記している。「だが、魂が自分だけで考察する時には、魂は、かなたの世界へと、すなわち、純粋で、永遠で、不死で、同じように有るものの方へと、赴くのである。そして、魂はそのようなものと親族なのだから、…いつも恒常的な同一の有り方を保つのである」<sup>44)</sup>。

「魂が自分だけで考察する」とは、魂の「自己同一」の状態を指す<sup>45)</sup>。魂の最も本来的な性質は知性であり、その本来的な機能は思惟なのであるから、魂が欲望や情念などに捉われることなく、魂は魂だけで「恒常不変なもの」(イデア)を観照することが、魂の自己同一であると考えられる。『パイドン』によれば、この状態に

至って魂は、「かの美」に触れることができるのであり、そして「知恵(フロネーシス)」という魂の徳を生む<sup>46)</sup>。それは至高の知恵であり、現象界のあらゆる美を美しくさせている美の根源を悟った状態であることを意味する。『国家』第10巻では、「徳の最大の褒賞」が不死であると述べられているが<sup>47)</sup>、その徳とはこのような至高の知恵を指すのであろう。それは神的な理性として見なされる。ディオティマが説く「真の徳」(注40の箇所参照)とは、このことを意味しているものと思われる。

プラトンの所説を踏まえるならば、人間が真に不死の存在になるためには、魂の自己同一こそ必要である。これは、精神があらゆる感覚的な欲望や情念の桎梏から解き放たれた状態である。敷衍すれば魂の自己同一とは、生物としての人間に備わった本能を超克しようとする試みであるとも言える。したがって人間が美のイデアと出会い、永遠の生を手にするためには、精神の壮大なる自己改革こそ不可欠なのであろう。換言すれば、これは人間がそれまで纏っていた感覚的な欲望や情念を脱ぎ捨てて、その魂が新たに生まれ変わることを意味する。つまり神的な魂の「出産」である。このようにプラトンが説く真の不死とは、魂の自己同一に至って起こりうる永遠の魂の誕生と解釈できないであろうか。

以上、まことに拙劣ではあったが、プラトンにおける不死の概念を美のイデアとの関連において考察してきた。彼の言葉を用いて言えば、美のイデアに対するエロースは、人間が「それらの存在(真実在)にみずからを似せよう、できるだけ同化しよう」とつとめる<sup>48)</sup>欲求であり行為であるとも解釈されよう。“永続的な不死”(不死性)が、「出産」によって個としての肉体や様々な知識を「あずかる」という与えられた不死であるとすれば(注30の箇所参照)、美のイデアに対するエロースは、人間が「真の不死」、つまり時空を超えて永生不滅の存在に自ら進んでなることを求める主体的な欲求であり、行為であると言えるだろう。

## 9. 結びに代えて

本稿の最後にあたって、いままでの叙述に関連する若干の疑問点を提示し、これをもって今後の課題としたい。

第一に、美のアイデアに対する「同化」の内容についてである。エロースとは、人間が美のアイデアに同化しようとする欲求であり、行為としても解釈されるわけであるが(注48の箇所参照)、そもそもこの同化とはいかなる内容のものなのであろうか。ここで言われている同化は、人間の魂がアイデアの永生不滅、恒常不変という実在の本質的性質を志向しているがゆえに起こりうるものであり、したがってそれは、魂がアイデアと同じ性質または似た性質になることである、とひとまず言えるだろう。このことは、魂それぞれが真の存在として実在化(アイデア化)していくことを意味しているのであろうか。さらに言えばこの同化とは、魂が美のアイデアに取り込まれてそれに一体化していくこと、と解釈できる余地はあるであろうか。

第二に、アイデアと感覚の関係である。プラトンは、『饗宴』における美のアイデアとの遭遇の場面で、「見る」、「触れる」という語を用いている。そもそも彼は、感覚とそこから生じる臆見は不確かなものであり、真実ではないとしてことごとく斥けていた。にもかかわらず彼が、このように感覚に依拠した表現を用いた理由をどのように考えるべきだろうか。またこれもすでに述べた通り、美のアイデアに至る道は至上の知を探求する道でもあったわけだが、美のアイデアの把握にあたって、知と感覚(知性と感性)の関係をどのように整理すべきであろうか。

第三に、「真の徳」の意味するものについてである。上述の通りプラトンの所説によれば、「かの美」を見て触れた者は真の徳を生むとされているが、それは「知恵(フロネーシス)」という魂の徳(注46の箇所参照)であると考えられる。これを、美のアイデアと人間の魂が接することによる徳の出産として見なすことができるだろう。あらゆる個別の美の根源であり、まさに神的なこのうえない実在である美のアイデアと極限の高みに達した知性を備えた人間との交歓によって

産み出された「真の徳」、つまり「知恵」という徳は、いかなる性質のものなのであろうか。それは、単にある人間の精神における理知的部分の働きが、他者よりも相対的に優れている状態としての知恵、という徳ではないはずである。そうであるならば「真の徳」は、現象界におけるあらゆる知恵を凌駕し、少なくとも実在の本質と同じほどの絶対的なものなのであろうか。それとも本稿で述べてきた出産という営みが、“単純再生産”ではなく“拡大再生産”を目指すものである以上(「6. 出産と不死」参照)、この新たに生まれた徳は、美のアイデアが見せる徳の最大の輝きよりも、さらなる光彩を放つのであろうか<sup>49)</sup>。

今後は、以上の疑問点や本文中で述べた美のアイデアと人間の不死の関係などを含めて、プラトン哲学の様々な論点について、斯界の動向を参考にしながら理解を深めてまいりたい。(了)

## 注

※本稿執筆にあたって、以下に記載する文献を参考にした。なお、プラトン著作の邦訳書については、慣行に従って訳書ページ数ではなく、ステファヌスページ数を付した。

- 1) プロティノス、斎藤忍随・左近司祥子訳『プロティノス「美について」』講談社学術文庫、2009年、89ページ。
- 2) プラトン、森進一・池田美穂・加来彰俊訳『法律(上)』岩波文庫、1993年、716C~D。
- 3) プラトン、鈴木照雄訳「饗宴」『プラトン全集5』(以下、『饗宴』)岩波書店、1974年、212A。鈴木照雄は、ディオティマが「プラトンの虚構になる人物」と述べている。鈴木照雄『饗宴』解説、同前書所収、274ページ。
- 4) プラトン、田中美知太郎訳『テアイテトス』岩波文庫、1969年、176A~B。
- 5) プラトン、種山恭子訳「ティマイオス—自然について—」『プラトン全集12』(以下、『ティマイオス』)岩波書店、1975年、41D。
- 6) プラトン、藤沢令夫訳『国家(下)』(以下、『国家(下)』)岩波文庫、1982年、484B。

- 7) 伊藤春美「プラトンにおける永遠と観照：『ティマイオス』と『饗宴』を通じて」『人間社会学研究集録』大阪府立大学、2009年5月、3～28ページ。  
田之頭一知「プラトン『ティマイオス』における時間の概念―「永遠を写す動く似像」としての時間についての試論」『藝術』第30号、大阪芸術大学、2007年12月、52～64ページ。
- 8) 『国家(下)』、486A。
- 9) 伊藤、前掲論文、25～26ページ。
- 10) プラトン、岩田靖夫訳『パイドン―魂の不死について―』(以下、『パイドン』) 岩波文庫、2006年、80B。
- 11) 『ティマイオス』、38B～C。
- 12) 伊藤、前掲論文、9ページ。
- 13) 田之頭、前掲論文、61ページ。
- 14) 同前論文、61ページ。
- 15) 同前論文、62ページ。
- 16) 久保勉「序説」、プラトン、久保勉訳『饗宴』所収、岩波文庫、1980年、5ページ。
- 17) 『饗宴』、202E。
- 18) 同前書、204A～B。
- 19) 久保、前掲書、29～30ページ。
- 20) 『饗宴』、204D～205A、206A。
- 21) プラトン、加来彰俊訳『ゴルギアス』岩波文庫、2007年、507C。
- 22) 同前書、507D～E。
- 23) プラトン、田中美知太郎訳「ソクラテスの弁明」『プラトン全集1』岩波書店、1975年、30B。
- 24) 同前書、38A。
- 25) 同前書、41C。
- 26) 『饗宴』、206B、207C。
- 27) 同前書、207A。
- 28) 同前書、207C～E、208A～B。
- 29) 同前書、207A。
- 30) 同前書、208A～B。
- 31) この部分の叙述は、同前書、210A～Eを参考にした。
- 32) 同前書、211B。
- 33) 同前書、211A。
- 34) 鈴木、前掲「『饗宴』解説」、292ページ。
- 35) 同前書、278～279ページ。
- 36) 同前書、211A～E。212A～C。
- 37) 『国家(下)』、485B。
- 38) 『パイドン』、79A。
- 39) 『国家(下)』486A、503E～504A。
- 40) 『饗宴』、211E～212A。
- 41) 伊藤、前掲論文、22～23ページ。
- 42) 『パイドン』、72A。
- 43) 伊藤、前掲論文、22ページ。
- 44) 『パイドン』、79D。
- 45) 同前書、78D。
- 46) 同前書、79D。
- 47) 『国家(下)』、608C。
- 48) 同前書、500C。
- 49) しかし美のアイデアがアイデアのヒエラルキーの最高位に君臨する以上、徳の拡大再生産という視座の設定に無理があるかもしれない。